



Title	倭名類聚抄と本草和名の共通出典について : 新修本草以外の漢籍を中心に
Author(s)	武, 倩
Citation	国語国文研究, 152, 100(1)-83(18)
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89726
Type	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_152_100(01)-83(18).pdf



[Instructions for use](#)

倭名類聚抄と本草和名の 共通出典について

—— 新修本草以外の漢籍を中心に ——

武 倩

1 はじめに

『本草和名』は918年頃に、深根輔仁によって編纂された日本現存最古の本草書であり、『倭名類聚抄』（以下『和名抄』）は934年頃に、源順によって編纂された平安中期を代表する意味分類体の漢和辞書である。『本草和名』が『和名抄』の編纂過程で基礎資料として用いられたことは、『和名抄』の序文によって明らかである。両書の引用関係については、河野（1983）と宮澤（1998a）の論考がある。

河野（1983）では、『本草和名』の出典である『新修本草』と比較することによって、『和名抄』の漢文本文にみえる出典名の「本草」は『新修本草』の本文であり「陶隱居注」「蘇敬注」はその注であると指摘している。そして、源順は少なくともこれらの部分を、孫引きの形で『本草和名』から引用したと推論している。

宮澤（1998a）では、『和名抄』と『本草和名』の関連項目801項を、その出典と引用方法に着目し、次の五種に分類している。

- (ア) 本草和名をそのまま引用するもの（漢籍本文の孫引きを含む） 370例
- (イ) 本草和名の注にある「出～」の出典を漢籍本文として引くもの 157例
- (ウ) 本草和名の施注にない本草系の漢籍出典を漢籍本文として引くもの 70例
- (エ) 本草和名の施注にない本草系以外の漢籍出典を漢籍本文として引くもの 202例
- (オ) 漢語抄・弁色立成を引くもの 2例

上記の中、(ア)は河野（1983）の結論に対応しているので、宮澤（1998a）は両書の関連項目とその範囲を広く捉えていることが窺える。しかしながら、関連項目の判定基準と内訳については、明示されていない。

本研究は、字面から分かる共通出典を手掛かりに、両書の共通部分を次の三種に整理する。

- ① 『和名抄』で直接『本草和名』を引くもの¹
- ② 『和名抄』で『新修本草』を引くもの（『本草和名』からの孫引きを含む）²

③ 両書の間で共通する『新修本草』以外の漢籍出典を引くもの

これらのうち、本稿では、今までの研究で殆ど検討されていなかった③の部分に注目し、『和名抄』と『本草和名』のそれぞれの引用の仕方を分析した上で、共通する部分の持つ意味を明らかにする。

調査に当たって、『本草和名』は「松本書屋本」と「万延元年影写本」³を参看して用いる。『和名抄』は十卷本系の「箋注本」を底本に用いる⁴が、異文の確認に際し、十卷本系と二十卷本系の諸本を参照する。

2 両書の体裁と引用方法

2.1 和名抄の序文と体裁

『和名抄』の序文にはその編纂経緯が書かれている。それによると、本書は醍醐天皇の皇女勤子内親王が源順に編纂させたものであるという。内親王は「和名」を捨てて顧みない風潮を嘆き、『文館詞林』や『白氏事類』は漢詩をつくる「風月之興」に便利だが、実際の言葉の意味に関する「世俗之疑」はそれらによっては決め難いと述べた。そしてこの「世俗之疑」を解決するものには、『辨色立成』、『楊氏漢語抄』、『和名本草』（すなわち『本草和名』）、『日本紀私記』があると語り、源順に諸家の善説を集めて書物を作るよう命じたのである。

(前略) 至于和名、弃而不屑。是故雖一百帙文館詞林、三十卷白氏事類、而徒備風月之興、難決世俗之疑。適可決其疑者、辨色立成、楊氏漢語抄、大医博士深根輔仁⁵奉勅撰集和名本草、山州員外刺史田公望日本紀私記等也。(中略) 汝集彼数家之善説、令我臨文無所疑焉。

この内親王の教命を受けた源順がどのような編纂方針をとったのか、という点についても、序文によって窺い知ることが出来る。それによると、「漢語抄之文」や「流俗人之説」に対しては、まず「本文」と「正説」⁶を挙げ、それぞれに注を付す。「本文未詳」の場合は、直接『辨色立成』『楊氏漢語抄』『日本紀私記』の文を挙げるという。

¹ 「新抄本草」、「新撰本草」、「本草」（割注）という字面で引用するもの。

² 「本草」（本行）、「陶隱居注」、「蘇敬注」という字面で引用するもの。

³ 武（2013）、武（2016）を参照。

⁴ 宮澤（1998b）が提唱する十卷本原撰説に従う。

⁵ この「深根輔仁」は箋注本による。曲直瀬本でも「深根輔仁」となっているが、尾張本では「深輔仁」となっており、京本類・昌平本・伊勢広本・大東急本では「深江輔仁」となっている。

⁶ 「本文の正説」と解釈する説もあるが、ここでは、高橋ほか（2006）の解釈に従う。

(中略) 或漢語抄之文、或流俗人之説、先舉本文正説、各附出於其注。若本文未詳、則直舉辨色立成、楊氏漢語抄、日本紀私記。(後略)

宮澤 (1986) では、上記の内容を「和名抄はその序文によれば、先行する四種の漢語抄類⁷の和訓を、それぞれにふさわしい「本文」掲げる形で集成したものである」(p.281)と要約している。しかし、なぜ「本文未詳」の場合になると、『辨色立成』、『楊氏漢語抄』、『日本紀私記』の文を挙げると序文に明示しながら、『本草和名』についてはここで言及していないのか、という疑問が生ずる。考えられる原因には、次の二点が挙げられよう。

1. 『本草和名』には「本文」そのものが存在している
2. 『本草和名』を手掛かりにすれば「本文」が見つかる

ここでは、結論を急がず、まず下掲の具体例から『和名抄』の体裁を分析し、『和名抄』における「本文」の意味⁸について考えよう。

(『和名抄』珍寶部 三 87 オ)⁹

雲母 本草云雲母【歧良々】多赤謂之雲珠五色具謂之雲華多青謂之雲英多白謂之雲液多黄謂之雲沙

『和名抄』の基本体裁として、一つの項目に、掲出漢語、漢文本文、和訓を含む割注の三要素が含まれている。この例では、「雲母」が掲出漢語で、「歧良々」が和訓注で、それ以外の部分は「本文」に相当する。

この例の「本文」にある「本草云」という部分は、掲出漢語「雲母」の拠り所を示している。すなわち、「本草」という漢籍に「雲母」という語があることを示している。「多赤謂之雲珠五色具謂之雲華多青謂之雲英多白謂之雲液多黄謂之雲沙」という部分は、「本草」における「雲母」の解釈文である。

このように、『和名抄』における「本文」が成り立つには、漢語とその典拠の対応関係がはっきりしていなければならない。次節では、その対応関係を『本草和名』に求めることが可能かどうかを検討する。

⁷ 漢語抄とは、漢語と和語を対照させた簡便な語彙集である。ここでは、『辨色立成』『楊氏漢語抄』『本草和名』『日本紀私記』の四種を指している。

⁸ 「本文」を重要視する平安時代の学問形態については、池田 (1969) が詳しい。

⁹ 『和名抄』の所在は『箋注倭名類聚抄』による。「三 87 オ」は巻三の 87 丁の表を表す。「【】」で括る部分は小字双行を表す。以下同じ。

2.2 本草和名の凡例と体裁

『本草和名』は、中国の本草書に記載される薬の漢名に和名を対照させた、本草学専門の語彙集である。『和名抄』とは異なり、典拠ある本文を掲載することよりも、薬の漢名をなるべく多く蒐集しようとする性格を持っている。

『本草和名』の上巻冒頭には出典に関する凡例が記されている。この凡例は二つの部分に分かれているが、まず下掲するその前半部分を見てみよう。

合一千廿五種

本草内薬八百五十種

諸家食経一百五種

本草外薬七十種【世用四種 稽疑三十三種 拾遺廿五種 新撰食経八種】

この部分は、項目の見出しについて、その内訳を示している。これによると、項目の見出しは、合計 1025 種で、その中「本草内薬」から 850 種、「諸家食経」から 105 種、「本草外薬」から 70 種を採録しているという。

「本草内薬」というのは『新修本草』に収録されている薬のことである。『本草和名』の編次は『新修本草』に倣っているので、両書の編次を比較することによって、凡例の前半部分の意味がより明瞭になる。ここで、両書が各巻の巻首で示した収録薬の種類や数を表 1 のように対照させた。

表 1 本草和名と新修本草の編次

巻別	『本草和名』	『新修本草』
第一巻	×	序例上
第二巻	×	序列下
第三巻	玉石上二十一種	玉石等部上品合二十二種
第四巻	玉石中三十種	玉石等部中品合三十種
第五巻	玉石下三十種	玉石等部下品合三十一種
第六巻	草上四十一種	草部上品之上合四十種
第七巻	草上三十八種	草部上品之下合三十八種
第八巻	草中三十七種	草部中品之上合三十七種
第九巻	草中三十九種	草部中品之下合三十九種
第十巻	草下三十五種	草部下品之上合三十五種
第十一巻	草下六十七種	草部下品之下合六十七種
第十二巻	木上三十七種	木部上品合二十七種
第十三巻	木中二十八種	木部中品合二十八種
第十四巻	木下四十五種	木部下品合四十五種
第十五巻	獸禽六十九種：本草五十六食経十三	獸禽部合五十六種
第十六巻	虫魚類百十三種：本草七十二食経四十一	虫魚部合七十二種

巻別	『本草和名』	『新修本草』
第十七巻	菓四十五種：本草二十五食経二十	菓部合二十五種
第十八巻	菜六十二種：本草三十八食経二十四	菜部合三十七種
第十九巻	米穀卅五種：本草二十八食経七	米等部合二十八種
第二十巻	有名無用 百九十三種	有名無用有合一百九十三種
本草外薬	七十種：稽疑三十三・新撰食経八・拾遺二十五・世用四	×

表1と凡例の前半部分を合わせて見ると、『本草和名』の第十五～第十九巻にある項目の見出しには、『新修本草』と『食経』の両方からとったものが混在しており、『本草和名』の末巻にある項目の見出しは、『新修本草』以外の出典からとっていることが分かる。

河野(1983)は上記のことに着目しており、『和名抄』は『新修本草』にない項目も「本草云」として引用してしまった例があることから、『本草和名』から「孫引き」した可能性があることを示唆している。しかし、その研究では、『本草和名』の凡例が言及されておらず、下掲する凡例の後半部分に対する解釈も当然なされていない。

諸家食経 諸家音義 本草雜要訣 本草拾遺
 大清経 神仙餌方 養性要集 抱朴子内篇
 本草稽疑 墨子枕中五行記 小品方 釋薬性
 丹草口訣 薬訣 五金粉薬訣 鑿真
 兼名苑 崔豹古今注 耆婆脉訣経 范注方
 葛氏方 本草疏 陶弘景注 蘇敬注
 録驗方 脚氣論 新方 廣利方 刪繁論
 龍門百八方 新録单方 千金方 玄感傳屍方
 以前諸書中薬別名皆抄出列於條下

この部分は、見出しの漢名に対する別名の出典を説明している。「諸家食経」¹⁰、「諸家音義」¹¹、「本草雜要訣」、「本草拾遺」など出典名を列挙した上で、「以前諸書中薬別名皆抄出列於條下」(以上の諸書に見られる薬の別名を全て各条の下に抄出した)と記している。ここで、その実際を本草和名における「雲母」の条を例に確認してみよう。

(『本草和名』上三 03 オ 3)¹²

¹⁰ 「崔禹食経」「七巻食経」などの総称である。詳しくは第3章を参照。

¹¹ 「仁譚本草音義」「楊玄操音義」などの総称である。詳しくは第3章を参照。

¹² 『本草和名』の所在は「松本書屋本」による。「上三 03 オ 3」は「上册第三巻3丁表3行目」を表す。「[]」は小字双行を表す。以下同じ。

雲母 一名雲珠【色多赤】一名雲華【五色具】一名雲英【色多青】一名雲液【色多白】一名雲沙【色多黃】一名磷石【色正白仁譚音履進反】一名雲膽【純黑者也】一名地（涿）¹³【色雜黑者也仁譚音卓楊玄操音祿已上二名出陶景注】一名六甲父母【出墨子五行記】一名華飛莢【出丹方】一名鴻光【出太清經】一名石銀【出兼名苑】雲母者星精也又云日精也【出范注方】和名歧良々 出陸奥国

『本草和名』凡例に沿って考えると、別名の「雲膽」「地涿」は「陶景注」から、「六甲父母」は「墨子五行記」から、「華飛莢」は「丹方」から、「鴻光」は「太清經」から、「石銀」は「兼名苑」から、「星精」「日精」は「范注方」から採っていることが推察できる。

「雲母」は『本草和名』の第三卷にある項目の見出しとなっているので、それに対応する『新修本草』の「雲母」の条も合わせて見てみよう。

（『新修本草』第三卷）¹⁴

雲母、味甘、平、無毒。主治身皮死肌、中風寒熱。如在車船上、除邪氣、安五臟、益子精、明目、下氣、堅肌、續絕、補中、療五勞七傷、虛損少氣、止痢。久服輕身、延年、悅澤不老、耐寒暑、志高神仙。一名雲珠、色多赤。一名雲華、五色具。一名雲英、色多青。一名雲液、色多白。一名雲沙、色青黃。一名磷石、色正白。生太山山谷齊、廬山、及琅琊北定山石間、二月採。澤瀉爲之使、畏鱗甲、及流水。按仙經雲母乃有八種：向日視之、色青白多黑者名雲母、色黃白多青名雲英、色青黃多赤名雲珠、如冰露乍白名雲沙、黃白晶々名雲液、皎然純白明澈名磷石、此六種并好服而各有時月。其黯黯純黑有文斑斑如鐵者名雲膽、色雜黑而強肥者名地涿、此二種并不可服。煉之有法、惟宜精細、不爾、入腹大害人。今虛勞家丸散用之、并隻搗篩、殊爲未允。琅琊在彭城東北、青州亦有。今江東惟用廬山者爲勝、以沙土養之、歲月生長。今煉之用礬石則柔爛、亦便是相畏之效。百草上露、乃勝東流水、亦用五月茅屋溜水。

『本草和名』の内容を『新修本草』に照らし合わせてみると、次のことが分かる。

- ・「雲母」「雲珠」「雲華」「雲英」「雲液」「雲沙」「磷石」部分は『新修本草』の本文から縮約されたものである（一重下線部分を参照）。
- ・「雲膽」「地涿」部分は『新修本草』の注（「陶景注」）から摘録されたものである

¹³ 「涿」という字が万延元年影写本では脱落している。

¹⁴ 大字は『新修本草』の本文部分（太字は『神農本草經』由来）を、小字はその注を表す。注に陶弘景によるものと蘇敬によるものがあり、蘇敬によるものには「謹按」が冠されている。この例では、蘇敬の注が施されておらず、小字部分はすべて陶弘景の注である。

(二重下線部分を参照)。

すなわち、割注形式の注文中で出典注記がなされていない「雲珠」「雲華」「雲英」「雲液」「雲沙」「磷石」の六つの漢名は、見出しの漢名「雲母」と同じく新修本草の本文からとっている。

このように、『本草和名』は『新修本草』と『食経』等をベースにして項目を立てた上で、その他の諸書にある別名を付け加える形で形成されたものである。項目立ての段階で採録した漢名については出典注記を省略するものの、次の段階で諸書から採録した別名については出典注記を施すようにしているのである。

ゆえに、『本草和名』に所収されている全ての漢名には典拠があるといえよう。『和名抄』の序文中で「本文未詳」の場合になると、『本草和名』の名が挙がらなくなったことはこれに起因しているのだろう。

上記のことを傍証するためには、『和名抄』が『本草和名』にある漢名の典拠をどれほど参考に行っているかを調査する必要があるだろう。この点に関しては、『和名抄』における『新修本草』の引用が『本草和名』を参考に行っていることが、既に河野(1983)によって証明されている¹⁵ので、次章ではそれ以外の漢籍出典について考察する。

3 両書の間で共通する新修本草以外の漢籍出典

3.1 出典名と引用例数の一覧

『和名抄』と『本草和名』に見られる漢籍出典については、藏中ほか(1999)と真柳(1987b)の調査がある。それらを参考にして、両書の漢籍出典を比較すると、40種ほどが共通していることが分かった。その中で、『本草和名』凡例で確認できるものが29種ある¹⁶。ここから、『新修本草』に由来する「陶弘景注」「蘇敬注」を除いた27種を表2にまとめた。

表2は、対象となる27種の漢籍出典に対し、『和名抄』と『本草和名』のそれぞれに見られる引用例数、共通する項目の例数を一覧としたものである。例数の比較を可能にするために、下記の要領に基づいて計算している。

- I. 『和名抄』と『本草和名』のそれぞれの引用例数は、項目単位で数える。
すなわち、同じ項目に複数出現しても、一つとして数える。
- II. 共通する項目の例数は、『和名抄』にある項目を基準に数える。

¹⁵ ただし、河野(1983)の考察は厳密性に欠ける部分があり、それについては稿を改めて報告したい。

¹⁶ 凡例で確認できないもの(「博物志」「漢武内伝」「爾雅」などの10数種)は、医薬専門書ではなく、かつ『本草和名』での引用頻度が低いいため、今回は検討の対象外とする。

すなわち、両書の関連項目が一对一ではない場合は、『和名抄』の項目数に従う。

表2 和名抄と本草和名の共通出典

分類	出典名	和名抄	本草和名	共通項目
[1] 諸家食経書	崔禹食経 ¹⁷	67	133	60
	七卷食経 ¹⁸	16	42	15
	孟詵食経 ¹⁹	5	5	1
	馬琬食経 ²⁰	5	3	2
	膳夫経 ²¹	2	1	1
	神農食経 ²²	1	2	0
[2] 諸家本草音義書	仁譚本草音義 ²³	3	199	3
	楊玄操音義 ²⁴	3	153	3
[3] 傍流本草書	釋薬性 ²⁵	8	116	8

¹⁷ 『和名抄』では「崔禹食経云」「崔禹経云」「崔禹曰」（本文）の形で、『本草和名』では「出崔禹」「出崔禹（錫）食経」「崔禹出」「崔禹云」「崔禹作」「崔禹音」「崔禹曰」「崔禹」の形で引用している。

¹⁸ 『和名抄』では「七卷食経云」（本文）の形で、『本草和名』では「出七卷食経」「七卷食経云」の形で引用している。

¹⁹ 『和名抄』では「孟詵食経云」（本文）の形で、『本草和名』では「出孟詵食経」「出孟詵」「孟詵曰」の形で引用している。

²⁰ 『和名抄』では「馬琬食経云」（本文）の形で、『本草和名』では「出馬琬」「馬琬云」「出馬琬食経」の形で引用している。

²¹ 『和名抄』では「膳夫経云」（本文）の形で、『本草和名』では「出膳夫経」の形で引用している。

²² 『和名抄』では「神農食経云」（本文）の形で、『本草和名』では「出神農食経」の形で引用している。

²³ 『和名抄』では「仁譚本草音義云」（本文）、「仁譚音義云」「仁譚音義」（割注）の形で、『本草和名』では「仁譚音」「仁譚上音」「仁譚〇〇二音」「仁譚（音義）作」「仁譚（音義）〇〇反」「出仁譚音義」の形で引用している。

²⁴ 『和名抄』では「楊玄操作」「楊玄操音義作」「楊玄操曰」（割注）の形で、『本草和名』では「楊玄操（音義）音」「楊玄操（音義）作」「楊玄操（音義）〇〇二音」「楊玄操上音」「楊玄操〇〇反」「楊玄音」「楊音」の形で引用している。

²⁵ 『和名抄』では「釋薬性云」（本文）の形で、『本草和名』では「出积薬性」「积薬性又云」「积薬性」「出积薬」の形で引用している。

分類	出典名	和名抄	本草和名	共通項目
	本草拾遺 ²⁶	5	35	4
	本草疏 ²⁷	5	22	3
	本草雜要訣 ²⁸	3	83	3
	太清經 ²⁹	1	46	1
	本草稽疑 ³⁰	1	23	1
[4] 服食・養生書	神仙服餌方 ³¹	2	29	2
	丹口訣 ³²	2	20	2
	養性要集 ³³	2	10	1
	葉訣 ³⁴	1	26	1
[5] 医方書	小品方 ³⁵	2	11	1
	古今録驗方 ³⁶	2	7	0

²⁶ 『和名抄』では「拾遺本草云」、「拾遺云」(本文)の形で、『本草和名』では「出拾遺」「出本草拾遺」の形で引用している。

²⁷ 『和名抄』では「本草疏云」(本文)、「見本草疏」(割注)の形で、『本草和名』では「疏文」「疏」の形で引用している。

²⁸ 『和名抄』では「雜要決云」(本文)の形で、『本草和名』では「出雜要決(訣)」「出雜藥訣」「出雜要」の形で引用している。

²⁹ 『和名抄』では「太清經云」(本文)の形で、『本草和名』では「出太清經」「出太清經」の形で引用している。

³⁰ 『和名抄』では「本草稽疑云」(本文)の形で、『本草和名』では「出稽疑」「出本草稽疑」の形で引用している。

³¹ 『和名抄』では「神仙服餌方云」(本文)の形で、『本草和名』では「出神仙服餌方」の形で引用している。

³² 『和名抄』では「丹口訣云」(本文)の形で、『本草和名』では「出丹口訣」「出丹秘口訣」「出丹藥口訣」「出丹藥訣」の形で引用している。

³³ 『和名抄』では「養性要集云」(本文)、『本草和名』では「出養性要集」の形で引用している。

³⁴ 『和名抄』では「葉訣云」(本文)の形で、『本草和名』では「出葉決(訣)」の形で引用している。

³⁵ 『和名抄』では「小品方云」(本文)の形で、『本草和名』では「出小品方」「小品方云」の形で引用している。

³⁶ 『和名抄』では「録驗方云」(本文)の形で、『本草和名』では「出録驗方」の形で引用している。

分類	出典名	和名抄	本草和名	共通項目
	刪繁論 ³⁷	1	3	1
	千金方 ³⁸	1	2	0
	新録单方 ³⁹	1	1	0
[6] その他	兼名苑 (注) ⁴⁰	180	228	68
	崔豹古今注 ⁴¹	7	26	5
	抱朴子内篇 ⁴²	2	5	1
	墨子枕中五行記 ⁴³	1	10	1

3.2 共通する項目の分析

次に、表2にある漢籍を五種類に分けて検討する。[1]～[5]の書は、『日本見在書目録』と『隋書』経籍志においては「医方」の類に一括で収録されているが、ここでは内容によって細かく分類した⁴⁴。

[1] 諸家食経書：「崔禹食経」「七卷食経」「孟詵食経」「馬琬食経」「膳夫経」「神農

³⁷ 『和名抄』では「刪繁論云」（本文）の形で、『本草和名』では「出那繁論」「出繁論」の形で引用している。

³⁸ 『和名抄』では「千金方云」（本文）の形で、『本草和名』では「出千金方」の形で引用している。

³⁹ 『和名抄』では「新録方云」（本文）の形で、『本草和名』では「出新録方」の形で引用している。

⁴⁰ 林（2001）では「『兼名苑注』は恐らく『兼名苑』が日本に伝えられてから日本人の手によって編集されたもの」と推測しているが、確実な証拠はまだ示されていない。『和名抄』における180例の中、「兼名苑」が137例、「兼名苑注」が43例。『本草和名』における228例の中、「兼名苑」が227例、「兼名苑注」が1例。関連項目を見ると、『本草和名』では「兼名苑」と記されているのに、『和名抄』では「兼名苑注」と記されているものが多数あるので、ここでは「兼名苑」と「兼名苑注」を区別せずに一括した。

⁴¹ 『和名抄』では「崔豹古今注云」（本文）の形で、『本草和名』では「出古今注」の形で引用している。

⁴² 『和名抄』では「抱朴子云」の形で、『本草和名』では「出抱朴子」の形で引用している。

⁴³ 『和名抄』では「墨子五行記云」（本文）の形で、『本草和名』では「出墨子五行記」「出墨」の形で引用している。

⁴⁴ 分類の仕方は真柳（1987a）を参考に行っている。

食経」

諸家食経書は、性味、毒の有無、禁忌、効能などを記した食事療法に関する書のことである。引用例を見ると、『和名抄』と『本草和名』には、共通する例と共通しない例（前者にあって、後者がない例）がある。また、共通する例の中に内容が類似するものと異なるものが見られる。その具体例を見てみよう。

- ・『和名抄』と『本草和名』に共通し、内容も類似する例（例1・例2）

例1

海月 崔禹食経云海月一名水母【久良介】貌似月在海中故以名之（『和名抄』 龜貝部 八51オ）

海月 【貌似月在海中故以名之】凝月【煮時即凝故以名之】一名水母【水母者蛇名形如覆笠無目蝦入其頭中為目出崔禹】和名久良介（『本草和名』 下十六 26 オ5）

例2

橙 七卷食経云橙【宅耕反安倍太知波奈】似袖而小者也（『和名抄』 果蔬菜部 九69ウ）

橙 【似袖而小出七卷食経】……和名阿倍多知波奈（『本草和名』 下十七 32 ウ7）

- ・『和名抄』と『本草和名』に共通するが内容に相違がある例（例3）

例3

胡瓜 孟詵食経云胡瓜【曾波宇利俗云歧宇利】寒不可多食動寒熱發癰病（『和名抄』 果蔬菜部 九75ウ）

胡瓜 【胡域多之故以名之出孟詵食経】一名再熟瓜【出崔禹】一名勒瓜【小而多汁】一名青瓜【已上二名出兼名苑】和名加良宇利（『本草和名』 下十八 34 ウ1）

「孟詵食経」は、『食療本草』（孟詵撰）のことで、敦煌残卷（S.76）が伝わっている。残卷（S.76）は137行、行毎に20余字、総計2774字で、26種類の薬物を掲載している。背紙には「長興五年（934）正月一日行首」と記された牒文が書かれているので、それに近い年代に書写されたものであるとされている⁴⁵。この残卷所掲の「胡瓜」の内容を見ると、『和名抄』の引用文がそれに拠っていることが分かる。

⁴⁵ 中尾（1930）、渡邊（1955）、小曾戸（1996）「第五章 第二節：スタイン文書」を参照。

(敦煌残卷 S.76:『食療本草』)⁴⁶

胡瓜【寒】、不可多食、動風及寒熱。又發疔瘡兼積瘀血。○案、多食令人虚熱、上氣、生百病、消人陰、發瘡及發眩氣及脚氣、損血脉、天行後、不可食。○小兒食、發痢滑中、生甘(疳)虫。又不可和酪食之、必再發。又搗根傳胡刺毒腫甚良。

・『和名抄』と『本草和名』に共通しない例(例4・例5)

例4

清盲 七卷食經云凡麩并梅李食之任身使子清盲【俗云阿歧之比】(『和名抄』疾病部 二50ウ)

例5

氷漿 ……膳夫經云立秋後不得飲氷漿(『和名抄』飲食部 四38ウ)

例3～例5のような例が見られることから、食經書の引用においては、『和名抄』が『本草和名』以外の資料(原典或いはその抄録)を利用したことは間違いないと言える。

ただし、引用例数が多い「崔禹食經」「七卷食經」については、『和名抄』の引用例の多数が、共通する例となっていることは注目に値する。この共通部分においては、『和名抄』は『本草和名』にある出典注記を手掛かりに、原典に当たった可能性があると考えられる。

[2] 諸家本草音義書:「仁譚本草音義」「楊玄操音義」

諸家本草音義書は、主流本草(『本草經集注』や『新修本草』など)に対する音義書のことである⁴⁷。『和名抄』にみえる引用例の中、漢文本文に引かれているものは下掲する例6の一例のみで、それ以外は全て割注に引用されているものである。

例6

鮫皮 仁譚本草音義云鮫魚皮【鮫音交佐女乃加波】装刀櫛者也(『和名抄』調度部 五45オ)

鮫魚 【仁譚音交】一名鰭魚皮【仁譚音倉各反装刀靶者也】……和名佐女(『本草和名』下十六20オ5)

⁴⁶ 太字は朱筆、「【】」は小字、○は朱点を表す。句読点は筆者による。

⁴⁷ 真柳(2014)「第六章 第五節:唐代の『明堂』文献」では「楊玄操音義」などについて考察しており、参照されたい。

割注に見られる引用例も含めて『本草和名』と比較した結果、それらがほぼ同じ内容であることから、『和名抄』は他の資料を参照せずに、『本草和名』に見える引用文を組み替えて本文を形成したと考えられる。

[3] 傍流本草書：「釋薬性」「本草拾遺」「本草疏」「本草雑要訣」「太清経」「本草稽疑」

傍流本草書は、『本草経集注』や『新修本草』など主流の本草書とされるもの以外の本草書を指すものである。引用例数を見ると、『和名抄』ではこれらの引用例が少なく、しかもその殆どが『本草和名』に共通している。共通する例の内容を確認すると、下掲する例7と例8のように類似するものが殆どである。

例7

細辛 釋薬性云細辛一名小辛【美良乃禰久散一云比歧乃比多比久散】（『和名抄』草木部 十21オ）

細辛 一名小辛一名細草【出釈薬性】和名美良乃禰久佐一名比歧乃比太比久佐（『本草和名』上六16オ7）

例8

田中螺 拾遺本草云田中螺其有稜者謂螭螺【太都比螭音知見龍類】（『和名抄』龜貝部 八40オ）

田中螺汁【崔禹音浩果反】一名螭螺【有稜者也出拾遺】和名多都比（『本草和名』下十六24オ9）

共通しない例には、次のようなものがある。

例9

野豆 本草疏云豌豆【上於丸反】一名野豆【乃良万女】（『和名抄』稻穀類 九14ウ）

赤小豆 ……小豆一名荅頭豆豌豆江豆野豆和名阿加阿都岐（『本草和名』下十九42オ8）

この例の場合は、「本草疏」の出典注記が現存本『本草和名』には見えないが、伝写の過程で出典注記の書き落しが生じた可能性も考えられるので、『和名抄』が『本草和名』以外の資料を参照したとは断言できない。

[4] 服食・養生書：「神仙服餌方」「丹口訣」「養性要集」「薬訣」

服食・養生書は、道家の長寿法（すなわち、丹薬を服用することによって、生命を

養って長生をはかる)に関連する書物のことである。[3]と同様に、『和名抄』の引用例は殆ど『本草和名』に共通しており、内容にも関係性が見いだされる(例10・例11を参照)。

例 10

桃脂 神仙服餌方云桃脂一名桃膠【毛々乃夜邇】(『和名抄』果蓏部 九 87 ウ)
桃椽 ……桃膠一名桃脂一名桃膏一名桃魄一名桃靈一名桃精一名桃父母【已上出
神仙服餌方】和名毛々(『本草和名』下十七 31 ウ 7)

例 11

薑【乾薑附】 ……養性要集云乾薑一名定薑【保之波之加美】(『和名抄』飲食部
四 67 オ)
乾薑 一名定姜【出養性要集】 ……和名久礼乃波之加美(『本草和名』上八 26 ウ
2)

共通しないものは次の一条のみである。

例 12

昌蒲 養性要集云昌蒲一名臭蒲【阿夜米久散】(『和名抄』草木部 十 68 ウ)
昌蒲 一名昌陽一名溪蓀一名蘭蓀【已上二名出陶景注】一名臭蒲【出香蒲條(蘇
敬)⁴⁸注】一名堯時蕪【出雜要訣】 ……和名阿也(女)⁴⁹久佐(『本草和名』上
六 13 ウ 6)

この例においては、「養性要集」の出典注記が現存本『本草和名』に見えないのは、伝写の過程で生じた誤写によるものである可能性が考えられる。

[5] 医方書：「小品方」「古今録驗方」「刪繁論」「千金方」「新録方」

医方書は、薬の処方記が記されている医学書のことである⁵⁰。『和名抄』にみえる例のうち、『本草和名』に共通するものは次の二例のみである。

例 13

鎮粉 小品方云鎮粉【美豆賀禰乃介布利】焼朱砂為水銀其上黒煙名也(『和名抄』

⁴⁸ 「蘇敬」という二文字が万延元年影写本では空白となっている。

⁴⁹ 「女」という二文字が万延元年影写本では脱落している。

⁵⁰ この「医方」は『日本見在書目録』や『隋書』経籍志の分類「医方」より狭義に用いている。

珍寶部 三 83 ウ)

丹砂 ……鎮粉【焼朱砂作水銀上黒煙名也出小品方】……唐又出伊勢国(『本草和名』上三 02 オ 2)

例 14

木天蓼 刪繁論云木天蓼【和太々比】(『和名抄』草木部 十 113 オ)

木天蓼 一名比鬼根【出那繁論】和名和多々比(『本草和名』下十四 4 オ 6)

それ以外の例は、全て巻二「疾病部」にみえるものである(例 15・例 16 を参照)。

例 15

長血 小品方云婦人長血【奈賀知又有白血】(『和名抄』疾病部 二 66 ウ)

例 16

齧齒 録驗方云齧齒【上胡戒反波賀美】睡眠而齒相切有聲也令人取其席下土内口中勿使知則止矣(『和名抄』疾病部 二 58 ウ)

また、『和名抄』の引用書目には、「醫家書」「脚氣論」「黄帝内經」「集驗方」「掌中要方」「針灸經」「太素經」「中黃子」「病源論」など、『本草和名』に見えない医方書も数多く含まれているので、この部分の引用においては、『本草和名』以外の資料が利用されていたと考えられる。

[6] その他:「兼名苑(注)」「崔豹古今注」「抱朴子内篇」「墨子五行記」

これらの書は、書目では「道家」「五行」「雑家」に分類されている。「墨子五行記」については、『和名抄』に見られる引用例(下掲する例 17)と『本草和名』との引用例は共通している。

例 17

雲脂 墨子五行記云頭垢謂之雲脂【和名加之良乃阿加一云以路古】(『和名抄』形體部 二 3 ウ)

頭垢 【楊玄操音敬】一名雲脂【出墨子五行記】(『本草和名』下十五 5 ウ 4)

それ以外の書については、『和名抄』に見られる引用例と、『本草和名』に見られる引用例との間で共通しないものが多い。特に、「兼名苑(注)」においては、共通する例が『和名抄』にみえる例の半分にも及ばない。そのため、これらの書の引用においては、[5]と同様に、『本草和名』以外の資料が利用されていたと考えられる。

上記の分析をまとめると、次の通りである。

- I. [2] 諸家本草音義書、[3] 傍流本草書、[4] 服食・養生書の引用に関しては、『和名抄』は『本草和名』をそのまま引用することが多い。
- II. [1] 諸家食経書の引用に関して、『和名抄』は『本草和名』にある出典注記を手掛かりにして、原典などを参照した可能性がある。
- III. [5] 医方書と [6] その他の書の引用に関しては、『和名抄』は『本草和名』以外の資料を利用することが多い。

4 おわりに

本稿は、共通する漢籍出典という側面から、『和名抄』と『本草和名』の関係を考察した。まず、『和名抄』の序文と『本草和名』の凡例を解説することによって、『和名抄』における「本文」の成立要素（漢語とその出典）を『本草和名』に求めることが出来ると推論した。

『和名抄』における『新修本草』の引用は『本草和名』を参考に行っていることが、従来の研究で既に言及されているので、今回は『新修本草』以外の漢籍を中心に調査を行った。

調査範囲を『新修本草』以外の漢籍 27 種に設定し、『和名抄』と『本草和名』のそれぞれに見られる引用例数と共通する部分の例数を対照した。そこから、『本草和名』にみえる出典注記がどれほど参照されているのかという点について分析を試みた。

「胡瓜」のような確実な例をもって、諸家食経書、医方書等の引用においては、『倭名類聚抄』は『本草和名』をそのまま引用するのではなく、原典などを直接参照した可能性があることを指摘した。

ただし、『和名抄』の編纂過程においては、『本草和名』にある出典注記が誤った形で取り入れられていることもある。この点については、狩谷椋齋が箋注で「誤引」であると指摘している。そこで別稿にて、椋齋の箋注を参考に、『和名抄』における『本草和名』の誤引を調査してみたい。

付記

本研究は武田科学振興財団「杏雨書屋研究奨励」の支援のもとで実施したものである。

本稿は、平成 30 年 7 月 28 日、北海道大学国語国文学会平成三十年大会での口頭発表を経て、池田証寿先生の御指導のもとに、論文としてまとめたものである。学会の席上およびその後、宮澤俊雅先生より御教示を頂戴した。また、投稿に際し、査読委員の先生方より貴重な意見を頂いた。深く感謝申し上げたい。

参考文献

【論著】

- 池田源太（1969）「平安朝に於ける『本文』を権威とする学問形態と有職故実」『延喜天曆時代の研究』吉川弘文館、pp.387-412
- 河野敏宏（1983）『『和名類聚抄』と『輔仁本草』の関係について：『和名類聚抄』漢文本文に関して』『岡大國文論稿』11、pp.16-26
- 藏中進ほか（1999）『倭名類聚抄十卷本廿卷本所引書名索引』勉誠出版
- 小曾戸洋（1996）『中国医学古典と日本一書誌と伝承一』塙書房
- 高橋忠彦ほか（2006）「倭名類聚抄序—国語辞典の濫觴—」『日本の古辞書：序文・跋文を読む』大修書店、pp.19-34
- 中尾万三（1930）「食療本草の考察」『上海自然科學研究所彙報』1(3)、東方文化事業上海委員會
- 武情（2013）『『本草和名』の諸本に関する一考察—万延元年影写本と全集本との関係を中心に—』『訓点語と訓点資料』131、pp.43-52
- 武情（2016）「松本書屋本『本草和名』について」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』15、pp.51-60
- 真柳誠（1987a）『『本草和名』所引の古医学文献』『日本医学雑誌』33(1)、pp.25-27
- 真柳誠（1987b）「本草和名引用書名索引」『日本医学雑誌』33(3)、pp.381-396
- 真柳誠（2014）『黄帝医籍研究』汲古書院
- 宮澤俊雅（1986）「『和名類聚抄』の和訓について」続紹一和訓に冠する「和名」の有無について—（2010年、勉誠出版）所収、pp.265-283
- 宮澤俊雅（1998a）「倭名類聚抄と漢語抄類」『倭名類聚抄諸本の研究』（2010年、勉誠出版）所収、pp.409-427
- 宮澤俊雅（1998b）「和名類聚抄の十卷本と二十卷本」『北海道大学文学部紀要』47(1)、pp.113-156
- 林忠鵬（2001）『『倭名類聚抄』所引『兼名苑』について』『和漢比較文学』和漢比較文学(27)、pp.51-61
- 渡邊幸三（1955）「敦煌本食療本草に対する文献学的研究」『本草書の研究』（1987年、武田振興財団杏雨書屋編）所収、pp.266-283

【テキスト】

- 『重輯新修本草』岡西為人重輯、国立中国醫藥研究所、1964年刊
- 『隋書經籍志詳攷』興膳宏、川合康三著、汲古書院、1995年刊
- 『日本國見在書目録』（宮内庁書陵部所藏室生寺本）名著刊行会、1996年刊
- 『本草和名』
- ・「松本書屋本」：『松本書屋貴書叢刊』第1巻、松本一男編、谷口書店、1993年刊
 - ・「万延元年影写本」：無窮会専門図書館神習文庫蔵本

『和名抄』十卷本系

- ・「箋注本」：『箋注倭名類聚抄』京都大学文学部国語学国文学研究室編、1943年刊
- ・「前田本」（京本類）：『古写本和名類聚抄集成 第二部 十卷本系古写本の影印対照』馬淵和夫編、勉誠出版、2008年刊
- ・「真福寺本」（尾張本）：『古写本和名類聚抄集成 第二部十卷本系古写本の影印対照』馬淵和夫編、勉誠出版、2008年刊
- ・「昌平本」：東京都立中央図書館蔵河田文庫本
- ・「曲直瀬本」：同上

『和名抄』二十卷本系

- ・「伊勢広本」：『古写本和名類聚抄集成 第三部 二十卷本系諸本の影印対照』馬淵和夫編、勉誠出版、2008年刊
- ・「天正本」（大東急本）：『古写本和名類聚抄集成 第三部 二十卷本系諸本の影印対照』馬淵和夫編、勉誠出版、2008年刊

(ぶ せい・北海道大学大学院博士課程修了)